

分担研究報告書

カネミ油症患者の漢方治療に関する実態調査に関する研究

研究分担者 貝沼 茂三郎 富山大学附属病院和漢診療科 特命教授

研究要旨 今年度はカネミ油症患者健康実態調査結果からカネミ油症患者に対する漢方薬の服薬状況について検証した。平成 27 年度と令和 2 年度のカネミ油症患者健康実態調査を比較すると平成 27 年度では 128/1443 名 (8.9%)、令和 2 年度では 180/1362 名 (13.2%) がそれぞれ漢方薬を内服していた。また令和 2 年度において漢方薬内服群は非内服群と比較して有意に年齢が高く、女性が多かった ($P < 0.0001$)。それぞれの年度で処方されている漢方薬は多い順に平成 27 年度は葛根湯、芍薬甘草湯、大建中湯、桂枝茯苓丸であり、令和 2 年度は芍薬甘草湯、桂枝茯苓丸、大建中湯、葛根湯の順であった。以上の結果より平成 27 年度と比較して令和 2 年度で全体として漢方内服患者が増加しており、特に高齢女性が服用していることがわかった。また処方としては特に桂枝茯苓丸の内服患者が増加していることが明らかになった。

A. 研究目的

これまでカネミ油症患者に対する漢方薬の服薬状況についてのまとまった報告はない。今回、我々は平成 25 年度から毎年実施されているカネミ油症患者健康実態調査結果からカネミ油症患者に対する漢方薬の服薬状況について検証する。

B. 研究方法

平成 27 年度と令和 2 年度のカネミ油症患者健康実態調査において内服薬ならびにサプリメント欄に記載されている漢方薬を抽出し、漢方薬の内服者数ならびに内服薬の変化について検証した。なお統計解析には統計解析ソフト JMPpro16 を用い、2 群間の比較には t 検定を用いた。結果の有意水準は両側 5%未満とした。

(倫理面への配慮)

本研究の結果においては、個人が特定できるようなデータは存在しない。

C. 研究結果

平成 27 年度においては 128/1443 名 (8.9%)、令和 2 年では 180/1362 名

(13.2%) がそれぞれ漢方薬を内服していた。そのうち、医師から処方されていた人数は全体の処方人数からするとそれぞれ 107/951 名 (11.3%)、171/967 名 (17.7%) であった。また令和 2 年度に関して漢方薬内服群 (男性 52 名、女性 128 名 平均年齢 71.8 歳) と非内服群 (男 595 例、女 587 例 平均年齢 66.7 歳) を比較すると、漢方薬内服群において有意に年齢が高く、女性が多かった (いずれも $P < 0.0001$)。

次に平成 27 年度では処方された漢方薬は多い順に葛根湯、芍薬甘草湯、大建中湯、桂枝茯苓丸であった (表 1)。また 23 名が薬局で漢方薬を購入していたが、その中には芍薬甘草湯が最も多く、6 名だった。一方、令和 2 年度では処方された漢方薬は多い順に芍薬甘草湯、桂枝茯苓丸、大建中湯、葛根湯であった (表 2)。また 10 名が薬局で漢方薬を購入していたが、その中では葛根湯が最も多く、5 名だった。また服用している漢方薬の種類を比較すると平成 27 年度が 50 種類であったのに対し、令和 2 年度は 75 種類であった。

D. 考察

平成 27 年度と令和 2 年度を比較すると全体として漢方薬を内服している患者が増加していた。その内訳を見ると葛根湯に関しては“かぜに葛根湯”と言われるように、疾患特異性は低いと考えられる。しかし芍薬甘草湯に関しては一般的にはこむら返りに頻用されるが、今回も同様の目的で使用されているのではないかと推測する。すなわち漢方医学的には血虚（末梢まで十分な栄養が行きわたらない状態）の患者が多いのかもしれない。

また 2 回の実態調査とも大建中湯の内服者が多かった。大建中湯は漢方医学的には腹部の冷えによるさまざまな消化器症状（便秘や下痢）に用いられる代表的な方剤である。また応用としては術後の腸閉塞予防としても広く用いられているが、令和 2 年度における併用薬の詳細から 12 名（66.7%）では便秘に対して用いられていると推測された。

さらに今回の検証で特記すべき点としては令和 2 年度では桂枝茯苓丸の内服患者が増加していたことである。これについては三苦らが平成 28 年度にカネミ油症患者に対する桂枝茯苓丸の臨床研究を行い、全身倦怠感、皮膚症状や呼吸器症状の一部が改善し、生活の質も向上したことを報告した¹⁾。その結果から桂枝茯苓丸が油症患者の症状軽減の治療薬の一つになり得ると期待され、内服患者が増加していたのではないかと考えられた。これはカネミ油症患者自身ならびに治療する側からもカネミ油症患者のさまざまな症状に対してエビデンスがある漢方薬への高い期待の裏付けなのかもしれない。

また今回の検証から平成 27 年度と比較して令和 2 年度において服用している漢方薬の種類が増加や、令和 2 年度において漢方薬内服群の方が非内服群よりも有意に高齢であったことから、カネミ油症患者の高齢化に伴う種々の症状に対して漢方

薬が有用である可能性が考えられた。

今後は油症患者がどのような症状に対して漢方薬を服用しているのか、またその効果も含めてさらに研究を深めていきたい。

E. 結論

平成 27 年度と比較して令和 2 年度で全体として漢方内服患者が増加しており、特に高齢女性が服用していることがわかった。また処方としては特に桂枝茯苓丸の内服患者が増加していることが明らかになった。

F. 研究発表

1. 論文発表

Kainuma M, Mitoma C, Tsuji G, Onozuka D, Nakaguchi T, et al. The Association between Objective Tongue Color and the Static Blood Findings of Yusho Patients. *Asian Journal of Complementary and Alternative Medicine*, Vol 9(3), 89-97:2021.

2. 学会発表

無し

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

無し

2. 実用新案登録

無し

3. その他

無し

参考文献

- 1) Mitoma C, Uchi H, Tsukimori K, Todaka T, Kajiwara J, et al (2018) Current state of yusho and prospects for therapeutic strategies. *Environ Sci Pollut Res Int*;25. 16472-80.

表 1 平成 27 年度主な漢方薬内服者数
(医師処方分)

処方名	人数
葛根湯	12
芍薬甘草湯	11
大建中湯	8
桂枝茯苓丸	6

表 2 令和 2 年度主な漢方薬内服者数
(医師処方分)

処方名	人数
芍薬甘草湯	28
桂枝茯苓丸	19
大建中湯	18
葛根湯	17